

柴田町文化財調査報告書第6集

入間野平城館跡

—令和2年度：調査受託事業発掘調査報告書—

令和3年12月

宮城県 柴田町教育委員会

柴田町文化財調査報告書第6集

入間野平城館跡

—令和2年度：調査受託事業発掘調査報告書—

令和3年12月

宮城県 柴田町教育委員会

序 文

柴田町には豊かな自然の中、国指定天然記念物の雨乞のイチョウや県指定史跡富沢磨崖仏群、明治時代から調査が行われ学術史的にも貴重な槻木貝塚群など、歴史的な遺産が数多く存在しています。これらの文化財は地域の人々によって大切に守り伝えられてきました。また、埋蔵文化財包蔵地(遺跡)は96箇所が登録されており、たゆみなく続いてきた人々の営みの痕跡が、今もそのまま土中に眠っています。柴田町の有形・無形の文化財は町民はもとより国民共有の財産であり、次世代への継承は、今を生きる私たちに与えられた重要な責務であると考えます。

しかしながら、私たちの生活様式の変化とともに、文化財を取り巻く環境もまためまぐるしい変化を遂げています。開発行為が増加し生活の利便性が向上する一方で、数百年、数千年の間守られてきた埋蔵文化財が、破壊や消滅の危機にさらされています。

このような中、当教育委員会では、開発機関と協議を重ね、多くの方々の理解と協力をいただきながら、文化財の後世への継承に努めているところです。

本書は、令和2年度に集合住宅新築工事に伴い本発掘調査を実施した入間野平城館跡の調査成果をまとめたものです。調査にあたりましては、地権者の皆様、地域住民の皆様に多くのご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

最後に、この成果が地域の歴史的解明の一助になりますことを願っております。

令和3年12月

柴田町教育委員会教育長 船迫 邦則

例 言

1. 本書は、宮城県柴田郡柴田町槻木下町一丁目 136 番 1、137 番 2、138 番における集合住宅新築工事に伴い、令和 2 年度に実施した「入間野平城館跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は柴田町教育委員会が主体となり、柴田町教育委員会生涯学習課が担当した。
3. 資料整理・報告書の作成は柴田町教育委員会生涯学習課が担当した。
4. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、以下の方々からご指導・ご助言を賜った（敬称略）。
石本弘 小川淳一 古川一明 菊地逸夫 黒田智章 後藤彰信 佐久間光平 鈴木豊 豊川光雄 藤沼邦彦
5. 本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の「柴田郡」（1/25,000）の地形図を複製して使用した。
6. 本書で使用した測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。調査区の小測量原点は第三章に示した。なお、方位は座標北を表している。
7. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。遺構番号は、遺構の種別に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。
SE：井戸跡 SD：溝跡 SK：土坑 P：柱穴・ピット
8. 遺構平面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。
遺構全体図：1/100 井戸跡・溝跡・土坑：1/60
9. 土色の記述にあたっては、『新版 標準土色帳 1994 年版』（小山・竹原 1994）を用いている。
10. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は 1/3（一部 1/5）で掲載している。
11. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、畠山未津留（柴田町教育委員会）が執筆・編集した。
12. 本遺跡の調査成果については、現地説明会・遺跡見学会などでその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本報告書がこれらに優先する。
13. 発掘調査の記録や出土遺物は、柴田町教育委員会が一括して保管している。

目 次

序 文
例 言
目 次
調査要項

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 発掘調査	4
第1節 調査地の位置	4
第2節 確認調査について	4
第3節 本発掘調査の方法と経過	5
第4節 基本層序	6
第5節 検出遺構と遺物	6
第Ⅳ章 総 括	15
写真図版	19

引用・参考文献
報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 入間野平城館跡の位置	1	第 9 図 SE10 井戸跡出土遺物	9
第 2 図 入間野平城館跡と周辺の遺跡	3	第 10 図 SE11 井戸跡出土遺物	9
第 3 図 調査区配置図	5	第 11 図 SD2 溝跡出土遺物	9
第 4 図 層序柱状図	6	第 12 図 SD3 溝跡断面図	10
第 5 図 入間野平城館跡の遺構平面図	7	第 13 図 SE6 井戸跡断面図	10
第 6 図 SE10 井戸跡断面図	8	第 14 図 SE8 井戸跡断面図	10
第 7 図 SE11 井戸跡断面図	8	第 15 図 SE9 井戸跡断面図	11
第 8 図 SD2 溝跡断面図	8	第 16 図 SE12 井戸跡断面図	11

第 17 図 SE14 井戸跡断面図 ……………11	第 24 図 西壁・SD1 溝跡断面図……………13
第 18 図 SE14 井戸跡出土遺物 ……………11	第 25 図 SD5 溝跡断面図 ……………13
第 19 図 SK15 土坑断面図 ……………12	第 26 図 P34 断面図 ……………13
第 20 図 SK18 土坑断面図 …………… 12	第 27 図 SD1 溝跡出土遺物 ……………14
第 21 図 SK19 土坑断面図 ……………12	第 28 図 P34 出土遺物 ……………14
第 22 図 SK20 土坑断面図 ……………12	第 29 図 (参考) 梁川城跡整地層出土かわらけ ……16
第 23 図 SK21 土坑断面図 ……………13	第 30 図 SD1 溝跡トレンチ断面図 ……………17

写 真 目 次

写真 1 調査風景 ……………6	写真 2 西壁の堆積状況 ……………6
------------------	---------------------

写真図版目次

写真図版 1 入間野平城館跡の空中写真……………19	写真図版 3 遺構・遺物の検出状況……………21
写真図版 2 調査区全景……………20	写真図版 4 出土遺物 ……………22

調 査 要 項

遺 跡 名：いりまのひらじろたてあと入間野平城館跡 (No.08091)

遺跡記号：IT

所 在 地：宮城県柴田郡柴田町槻木下町一丁目 136 番 1、137 番 2、138 番

調査原因：集合住宅新築工事

調査主体：柴田町教育委員会

調査担当：柴田町教育委員会生涯学習課

調査期間・面積：

[確認調査] 令和 2 年 (2020) 3 月 3 日～3 月 6 日

60㎡

[本発掘調査] 令和 2 年 (2020) 5 月 18 日～6 月 19 日

230㎡

調 査 員：[確認調査] 大友智 畠山未津留 岡山卓矢

[本発掘調査] 畠山未津留 岡山卓矢 土岐山武 大久保政勝

調査協力：佐藤建夫 大東建託株式会社 仙台支店

第1章 調査に至る経緯

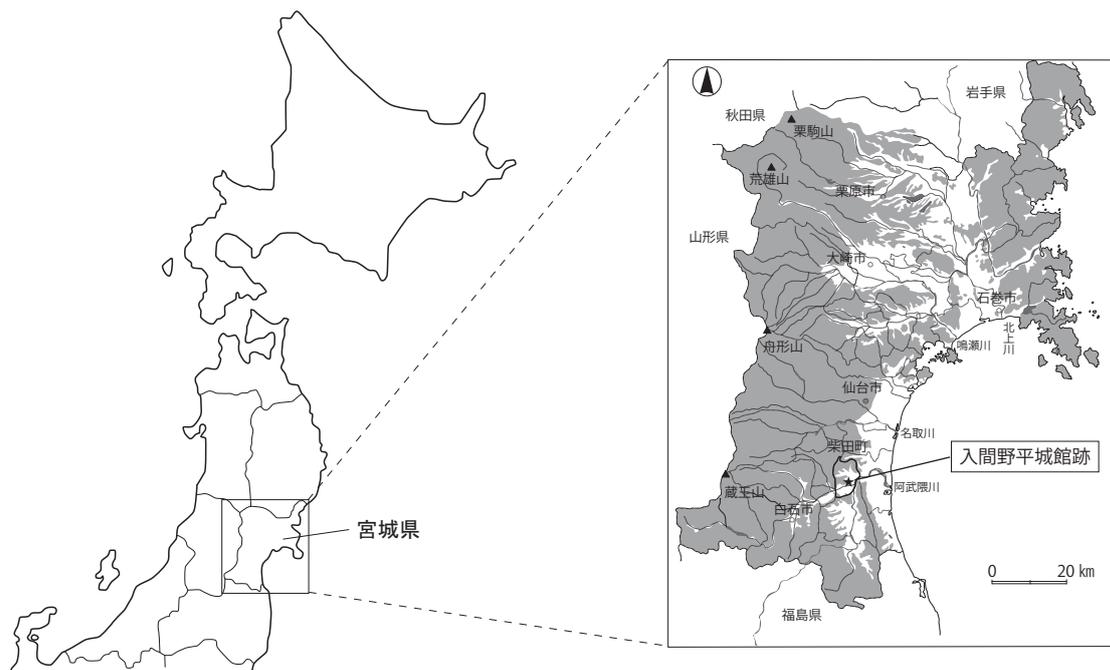
今回の発掘調査は、柴田郡柴田町槻木下町の集合住宅新築工事計画に伴うものである。入間野平城館跡の指定区域西部の地権者より、埋蔵文化財の関わり協議書が提出された（令和2年1月7日）。集合住宅の新築にあたり、基礎部に直径22cm、全長11mの支持パイプを116本打ち込む計画で、宮城県教育委員会からは、確認調査を要する旨の回答が示された（令和2年1月15日・文第2602号）。これを受け、柴田町教育委員会は申請地の確認調査を令和2年3月3日（火）～6日（金）に実施した。その結果、井戸跡、溝跡、土坑、ピットを確認した。

この調査成果を受けて、柴田町教育委員会は地権者と遺構保全のための協議を行ったが、地権者より在来工法では建物を支えるための地耐力が十分に得られず、当初設計のまま施工せざるを得ないとの回答があった。その後の協議において、地権者が柴田町教育委員会へ発掘調査を委託することに決定し、発掘調査に要する期間や予算について合意に至った。本発掘調査は令和2年5月18日（月）より着手し、同年6月19日（金）に調査の一切が終了した。

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

柴田町は宮城県南部、県庁所在地である仙台市の南方約25kmに位置している（第1図）。町は奥羽山脈と阿武隈山地に連なる標高100～150mの山地に囲まれており、町城南東部の白石川流域に開けた船岡盆地と北東部の阿武隈川流域に開けた槻木盆地からなる。両盆地は白石川と阿武隈川によって形成された沖積地で、旧流路沿いには幾筋もの自然堤防が発達し、集落や旧街道はこれらの微高地



第1図 入間野平城館跡の位置

上に形成されている。自然堤防の後背地はかつて谷地や沼沢地であったと考えられる。

今回の調査地が位置する槻木盆地は、西に向かうほど複雑な開析谷に姿を変え、やがて富沢（とみざわ）、入間田（いりまだ）、葉坂（はざか）、成田（なりた）、船迫（ふなばさま）の5つの支谷となって奥羽山脈に突き当たる。こうした一帯は、縄文時代前期には海岸線が複雑に入り組む内海であった。奥羽山地から延びる上川名・入間田・葉坂・海老穴・成田などの丘陵は、内海に張り出した「岬」の名残である。そのため、現在も丘陵部の露頭では当時の海岸線の名残である「海蝕崖（かいしょくがい）」が観察できる。縄文時代早期から中期にかけて、これらの丘陵上に集落が営まれ、松崎貝塚、上川名貝塚、中居貝塚、館前貝塚、金谷貝塚などから成る「槻木貝塚群」が形成されたと考えられる。その後の海退と阿武隈川・白石川による沖積作用により、縄文時代の遺構はその多くが埋没したと推定され、過去には金谷貝塚から南に200m離れた水田の地下8mの地点から、縄文時代の櫛3本が出土した例もある。

今回の調査地である入間野平城館跡は槻木盆地の東部、阿武隈川と白石川の合流点に近い沖積平野に位置する。周囲は阿武隈川左岸の自然堤防上に発展した槻木の市街地で、旧奥州街道や国道4号線、東北本線、西隣の村田町に至る街道の起点など、交通の要衝である。その一方で、市街地の西から北にかけて広がる水田地帯の標高が低く、長年にわたり水害に悩まされてきた歴史を持つ。（第2図）。

第2節 歴史的環境

今回の調査地が位置する槻木盆地は、平野部には遺跡が少ない一方で、盆地にせり出した丘陵部に多くの遺跡が分布している。その多くは縄文時代の遺構であり、これらによって槻木貝塚群が形成されている。貝塚が立地する場所は縄文時代以降も良好な居住環境であったため、さまざまな時代の複合遺跡である場合が多い。

今回の調査対象地である入間野平城館跡の周辺の遺跡をみると、やはりその多くが縄文時代を中心とするものである。入間野平城館跡の北には町史跡の上川名貝塚（21）、金谷貝塚（18）、中居貝塚（17）、深町貝塚（15）、また北西丘陵部には、同じく町史跡の館前貝塚（12）、南西に松崎貝塚（3）がある。弥生時代の遺跡は単独で指定されるものはなく、複合遺跡として館前貝塚や上川名貝塚などに限られ、その数も少ない。こうした傾向は古墳時代の前・中期も同様である。古墳時代後期以降から奈良時代にかけて、柴田町内にも横穴墓群が作られるようになる。その代表的なものが柴田町西部の上野山古墳群であるが、槻木盆地では入間野平城館跡の北約1.3kmに位置する町史跡炭釜横穴墓群が知られている。昭和44、45年に学術調査が実施され、鉄刀や玉、馬具、墨書土器などが出土している。横穴墓以外の奈良・平安時代の遺跡では、散布地の指定は多いものの、学術調査が実施されたケースは少ない。槻木盆地北西部の葉坂戸ノ内遺跡では新幹線の敷設工事の際に発掘調査が実施され、平安時代の竪穴建物跡のほか、中世陶器などの遺物も出土している。

中世の城館を概観すると、白石川右岸では船岡館跡がある。元禄時代以降の近世の様子は把握できるものの、中世の実像は文献資料に乏しく不明である。しかし近年に至り、城址から中世陶器やかわらけ、青磁等が表採されていることから、中世には何らかの施設が存在したと考えられる。同様に詳



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	入間野平館跡	自然堤防	城跡	中世	11	中ノ内遺跡	丘陵	散布地	縄文	21	町史跡上川名貝塚	丘陵	貝塚	縄文早～中・弥生・古墳中
2	新畑中遺跡	沖積平野	散布地	古代	12	町史跡館前貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文前～晩・弥生	22	川名沢遺跡	丘陵斜面	集落	縄文後・晩・弥生・古墳前・古代
3	町史跡松崎貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文早・前・奈良・平安	13	入間野山城館跡	丘陵	城跡	中世	23	烏井崎 B 遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
4	八幡館跡	丘陵	城跡	中世	14	鍛冶内遺跡	丘陵	製鉄	不明	24	烏井崎 A 遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古代
5	寺入山遺跡	自然堤防	散布地	中世・近世	15	深町館跡	丘陵	貝塚	縄文前～後					
6	土平遺跡	丘陵	集落	縄文前～後・古代	16	深町館跡	丘陵	城跡	中世					
7	沼ノ内 B 遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文	17	町史跡中居貝塚	丘陵	貝塚	縄文早～後					
8	沼ノ内 C 遺跡	丘陵麓	散布地	平安	18	町史跡金谷貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文早～中・晩 古墳中					
9	町史跡台遺跡	丘陵	散布地	縄文中・後	19	金谷岡遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文後・晩					
10	沼ノ内 A 遺跡	沖積平野	散布地	縄文後・晩・弥生・古代	20	上川名館跡	丘陵	城跡	中世					

第2図 入間野平城館跡と周辺の遺跡

細が不明とされる館跡に、船岡盆地南東部の西館館跡がある。中名生地区にあるこの館跡は東西、南北ともに 300m におよぶ広大な平城で、現在も堀跡や土塁の痕跡が残るものの、城に関する文献資料は確認されていない。

白石川左岸の槻木盆地では、入間野平城館跡の北西 1.3km に入間野山城館跡 (13) がある。槻木盆地にせり出した丘陵の先端に築かれており、宅地造成により北西側は失われているが、東側には現在も段郭状の地形がみられる。入間野平城館跡に近接することから関連性も指摘されてきたが、裏付けはない。入間野平城館跡の南東 1 km の独立丘陵上には八幡館跡 (4) がある。阿武隈川と白石川の合流点を間近で見下ろす場所にあり、東西 300m、南北 100m の丘陵全体が館跡とされるが、空堀や土塁などの遺構は見られないため、陣所である可能性も指摘されている。このほかにも、槻木盆地にせり出した丘陵上には、上川名館跡 (20) や深町館跡 (16) といった多くの館跡が分布するが、文献による裏付けがなく、発掘調査が行われていないため、詳細は不明である。

第 III 章 発掘調査

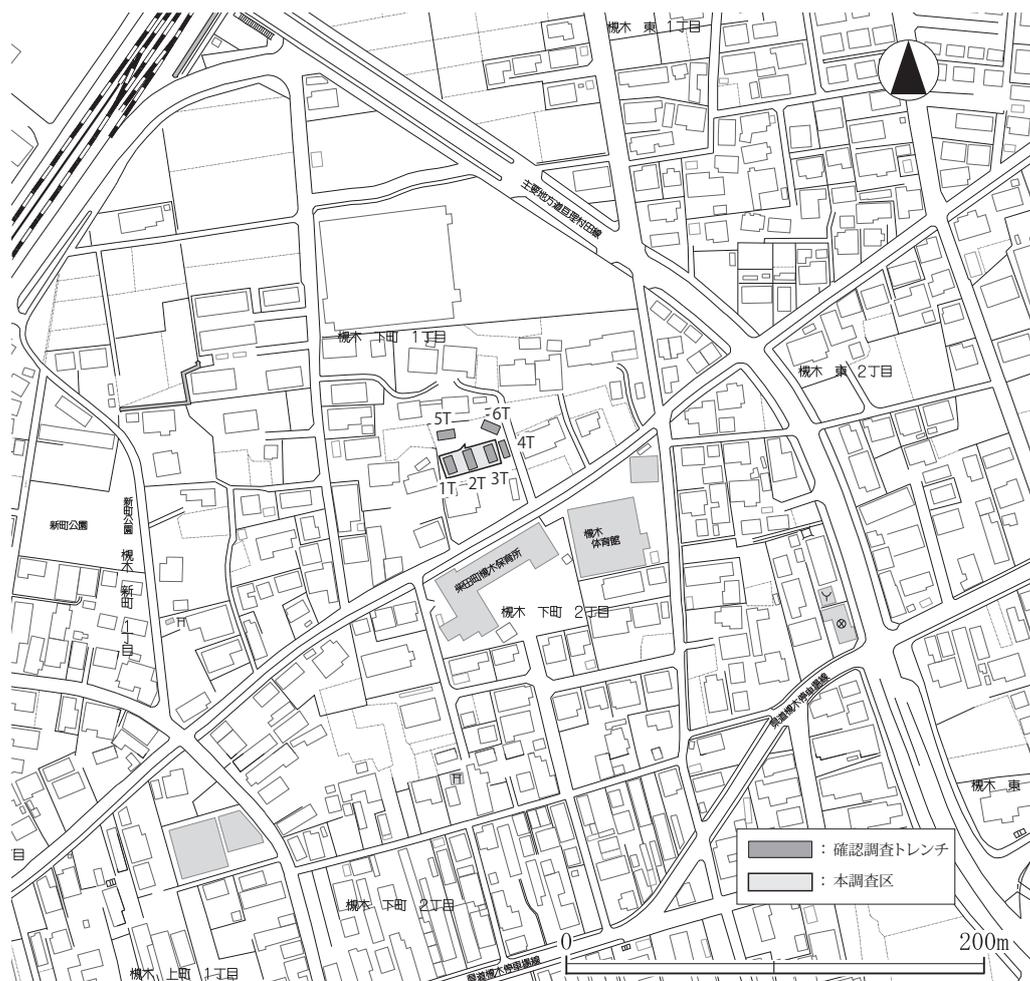
第 1 節 調査地の位置

今回の調査地は槻木盆地の東部、阿武隈川と白石川の合流点から 1.3km 北の自然堤防上に位置する。東側を流れる阿武隈川に沿って標高 7 m 前後の微高地が馬の背状に延びており、旧奥州街道と槻木宿、東北本線や国道 4 号線もこの微高地上に位置する。微高地の西～北側は標高 5～6 m の水田地帯である。昭和 22 年当時の空中写真 (写真図版 1-2) を見ると、南北 270m、東西 250～260m の方形状の地形が見えることや、北辺から北東にかけて、外堀跡を反映しているとみられる幅 20m の水田の区画も観察できる。城館跡の地盤高は、周囲の水田より 1.5m 程度高く、城内を区画する堀跡や土塁も残存していた (柴田町教育委員会 1978)。また、城館敷地の南東角が槻木小学校の敷地 (現槻木体育館・槻木保育所) となっており、敷地の外周には土塁状の高まりや堀が巡っていたという。

今回発掘調査を実施した場所は、城館の北東部に位置し、地元では「城の中心」と伝えられる場所で、現在は畑地である。昭和 22 年の写真でも畑地として使用されていることがわかる。

第 2 節 確認調査について

確認調査は柴田町教育委員会が令和 2 年 3 月 3 (火)～6 日 (金) に実施した。申請地に幅 2m × 全長 10m 前後のトレンチを 6 本設置して調査を行った。遺跡の広がりを確認するため、建物基礎以外の場所についても調査対象とした。その結果、すべてのトレンチで溝跡、土坑、ピット等の遺構を確認した。建物敷地部分にあたる T1～4 では、いずれの地点でも東西方向の大規模な溝跡を検出した。また、敷地北東に設けたトレンチでは、土坑の上面から在地産とみられる中世陶器の甕の破片 1 点が出土した。



第3図 調査区配置図

第3節 本発掘調査の方法と経過

本発掘調査は令和2年5月18日(月)～同年6月19日(金)に実施した(写真1)。申請地の標高は6.7m前後の平坦な畑地である。調査面積は集合住宅基礎部分の230㎡である。表土掘削にはバックホー(0.45㎡)を使用した。各調査区の深さは-70～80cm前後である。検出面下の地層を確認するため、調査区の一部(50cm×50cm)をスコップで深堀し、ハンドオーガーも併用した。

平面図(調査区)の作成に際しては、以下の基準点2点(BM1・BM2)を用いて測量を行った。座標値は以下のとおりである。

BM1 : X = - 213,060.023 Y = - 1,630.886 BM2 : X = - 213,055.416 Y = - 1,609.211

断面図は基本的に縮尺 = 1/20 で作成した。地層の柱状図も適宜作成した(第4図)。写真撮影には一眼レフデジタルカメラ(Nikon D610 2,426万画素)を使用した。

発掘調査は6月19日(金)に終了し、調査区全域の埋め戻し等は6月26日(金)までに終了した。調査は、調査員4人、作業員は1日平均5人体制で実施した。



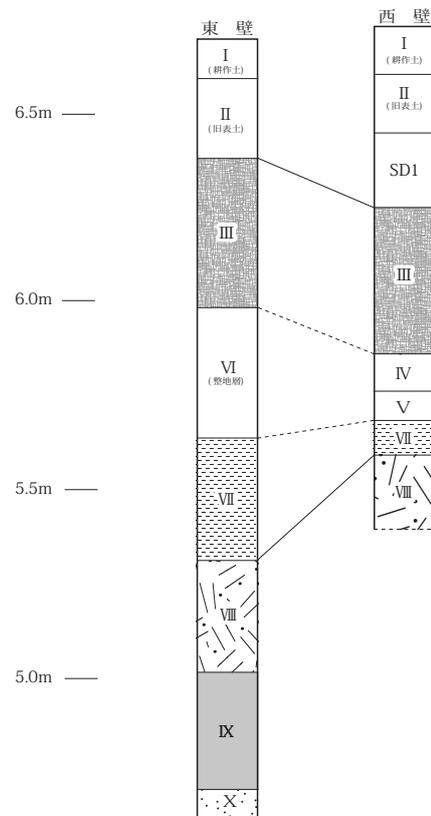
写真1 調査風景（南西から）



写真2 西壁の堆積状況

第4節 基本層序

基本層序は次の通りである。I層：現表土（畑耕作土、層厚 15～20cm）、II層：オリーブ褐色シルト（旧表土、層厚 20～30cm）、III層：暗オリーブ褐色シルト層（層厚 40～50cm、炭化物を多く含む）、IV層：黄褐色粘土質シルト（層厚 5～10cm、黒褐色ブロック（φ 5～10cm）を 50%含むマール状）、V層：黒褐色粘土質シルト層（10cm）、VI層：暗灰黄色粘土質シルト（整地層、層厚 30～40cm、黄褐色および黒褐色ブロック（φ 5～10cm）を 50%含むマール状）、VII層：にぶい黄色粘土（層厚 10～30cm）、VIII層：にぶい黄色砂層（層厚 30cm）、IX層：黒色粘土（層厚 30cm）、X層：粗砂層（層厚 30cm以上）。各調査区の層序は第4図の柱状図で示した。遺構の検出は、IV～VI層上面で行った。



第4図 層序柱状図

第5節 検出遺構と遺物

(1) 検出状況

今回の調査地は住宅街の中の畑地で、標高は 6.7m 前後である。調査区は建物の基礎部分とし、東西 20m、南北 8.6m の長方形である。現況地盤 G L - 70 cm 前後の IV 層および VI 層上面で遺構を検出した。遺構は井戸跡 7 基、溝跡 4 条、土坑 5 基、ピット 120 基を検出した（第 5 図）。

(2) 遺構と遺物

1) 中世

①井戸跡

【SE10】（第 5 図、写真図版 2 - ②、3 - ②）

調査区東側で検出した。SD3、SK21 と重複し、これらより古い。井戸枠は抜き取られている。掘



第5図 入間野平城館跡の遺構平面図

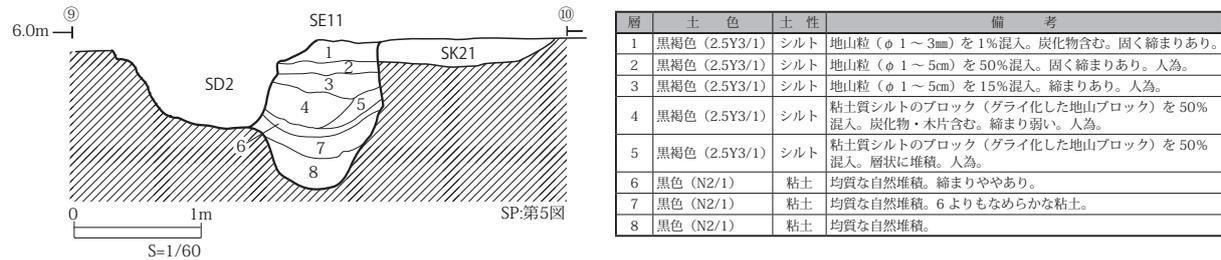
り方の平面形は 2.3 × 3.2m の楕円形で、深さは 1.1m である。断面形は上幅の広い U 字形で、底面は 80cm の楕円形である。堆積土は 5 層に大別できる。遺物は埋土から石臼、中世陶器、かわらけ、掘り方埋土から中世陶器甕が出土している（第 9 図）。



第 6 図 SE10 井戸跡断面図

【SE11】（第 5 図、写真図版 3—③）

調査区東側で検出した素掘りの井戸跡である。SD2、SK21 と重複し、SD2 よりも古く、SK21 より新しい。掘り方の平面形は 1.0 × 1.2m の楕円形で、深さは 1.2m である。断面形底面は U 字形で、底面は 60cm の円形である。堆積土は 8 層で、上位 5 層が人為的な埋土、下位 3 層が自然堆積である。かわらけ、中世陶器播鉢が出土している（第 10 図）。



第 7 図 SE11 井戸跡断面図

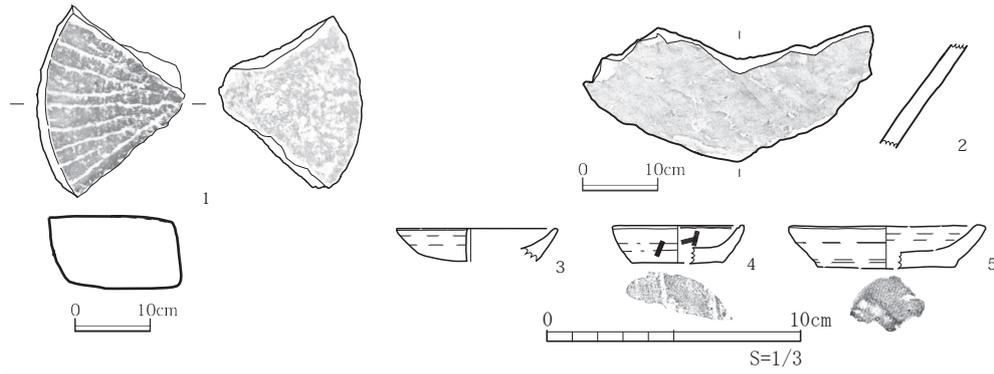
②溝跡

【SD2】（第 5 図、写真図版 2—①、3—④）

調査区東側で検出した南北方向の溝跡である。規模は上幅 1.2 ~ 1.6 m、底幅 50 ~ 60cm、深さ 80cm ほどである。SE11、SK21 と重複し、これらよりも新しい。断面形は有段の U 字状で、底面は平坦である。堆積土は 2 層に分けられ、上層が暗灰色粘土質シルト、下層が暗灰色粘土の自然堆積である。遺物は上層より天目茶碗、かわらけ、中世陶器甕が出土している（第 11 図）。



第 8 図 SD2 溝跡断面図



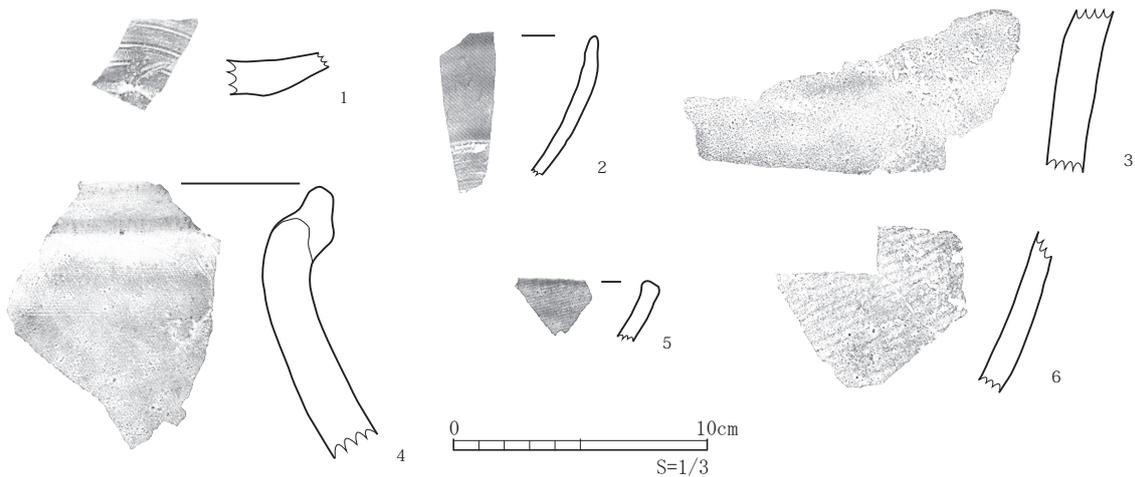
No.	器種	層	法量 (cm)			特徴	写真	登録
			口径	底径	器高			
1	石白・下白	埋土・中～上層	—	—	—	材質：安山岩 厚さ：82mm、直径：30cm、主溝：放射状 副溝：なし 中央付近に被熱の痕跡	4-4	IT1
2	中世陶器 甕	掘り方埋土	—	—	—	外：ヘラケズリ 裏面は全面が剥落 甕の上部もしくは底部	4-5	IT41
3	かわらけ	埋土・中～上層	—	—	—	内外：ロクロナデ 底部：不明 口縁の一部	4-1	IT9
4	かわらけ	埋土・中～上層	(5.2)	(3.6)	2.0	内外：ロクロナデ 底部：板状圧痕 口縁部から底部にかけての一部	4-2	IT11
5	かわらけ	埋土・中～上層	(7.8)	(5.4)	3.2	内外：ロクロナデ 底部：板状圧痕 口縁部から底部にかけての一部 燈明皿に転用	4-3	IT12

第9図 SE10 井戸跡出土遺物



No.	器種	層	法量 (cm)			特徴	写真	登録
			口径	底径	器高			
1	中世陶器 播鉢	上層	—	—	—	内外：ヨコナデ 胎土：均質で1～3mmの白色の風化礫を僅かに含む。白石・一本杉窯跡出土資料に類似	4-6	IT17
2	かわらけ	上層	—	—	—	内外：ロクロナデ 口縁の一部 全体に摩滅	4-7	IT27
3	かわらけ	7	—	(5.4)	—	見込み：ナデ 底部：回転糸切り→ナデ→板状圧痕。見込みに墨書あり	4-8	IT10

第10図 SE11 井戸跡出土遺物

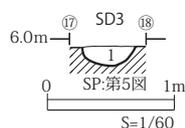


No.	器種	層	法量 (cm)			特徴	写真	登録
			口径	底径	器高			
1	かわらけ	1	—	—	—	内外：ロクロナデ 底面：側面のロクロ目に沿って三本の沈線あり	4-10	IT15
2	天目茶碗	1	—	—	—	内外面体部：鉄釉 胎土：5GY7/1 明オリープ灰色、均質・緻密で不純物なし 中国産か	4-9	IT7
3	中世陶器 甕	1	—	—	—	内：ナデ 外：ヘラナデ 体部	4-13	IT23
4	中世陶器 甕	1	—	—	—	内外：ヨコナデ 口縁部内側に段が付くが受口状 在地産	4-12	IT2
5	陶器	1	—	—	—	口縁部 内側に陵あり	4-11	IT32
6	須恵器 甕	1	—	—	—	内：オサエ 外：タタキ	4-14	IT8

第11図 SD2 溝跡出土遺物

【SD3】(第5図、写真図版2-②、3-②)

調査区東側で検出した東西方向の溝跡である。SE10、SE11、SD2、SK21と重複し、SE10より新しく、SE11、SD2、SK21 よりも古い。規模は上幅 40cm、底幅 20cm、深さ 20cmほどである。断面形は上が開いたU字状を呈し、底面は平坦である。堆積土は1層で、黒褐色シルトである。出土遺物はない。



層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	地山粒 (φ 1~5mm) 5%及び炭化物を含む。締まりあり。

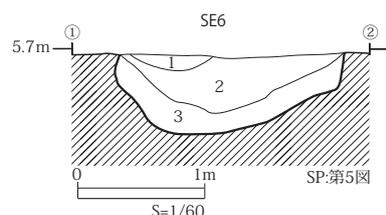
第12図 SD3 溝跡断面図

2) 時期不明

①井戸跡

【SE6】(第5図、写真図版3-①)

調査区西側で検出した素掘りの井戸跡である。掘り方の平面形は直径 1.8m の円形で、深さは 60cmである。重複はない。断面形は上の開いたU字形で、底面は 60cmの円形である。堆積土は3層に大別でき、埋1層が炭化物を含む黒褐色シルト、埋2層が多量の炭化物を含む黒色粘土質シルト、埋3層が黄褐色粘土である。埋土はいずれもラミナ状の自然堆積である。出土遺物はない。

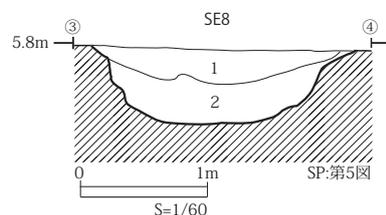


層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	地山粒 (φ 1~5mm) 5%と炭化物を含む。締まりあり。
2	黒色 (2.5Y2/1)	粘土質シルト	灰を多量に含む。自然堆積。ラミナあり。火災後の流れ込みか。
3	黄褐色 (2.5Y5/1)	粘土	均質で締まりなし。自然堆積。

第13図 SE6 井戸跡断面図

【SE8】(第5図、写真図版3-①)

調査区の西部で検出した素掘りの井戸跡である。掘り方の平面形は直径 2m の円形で、深さは 60cmである。SD5 と重複し、それよりも新しい。断面形は皿状で、底面は 80cmの円形である。堆積土は2層で、埋1層が黒褐色シルト、埋2層が黒色粘土質シルトである。いずれも自然堆積である。出土遺物はない。



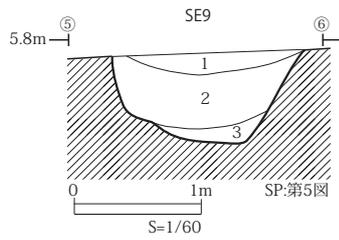
層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	砂と酸化鉄粒を含む。
2	黒色 (2.5Y2/1)	粘土質シルト	下層ほど粘質。粘土ブロック (φ 10~15cm) および砂を全体に含む。

第14図 SE8 井戸跡断面図

【SE9】(第5図)

調査区北部で検出した素掘りの井戸跡で、排土用スロープ部で検出した。確認できる部分で、掘り方の平面形は 1.5m の楕円形を呈しており、深さは 72cmである。遺構の重複はない。断面形は上の開いたU字形で、底面は 50cmの円形と推定される。堆積土は大別3層で、埋1層が暗オリーブ褐色粘土質シルト、埋2層が黒褐色粘土質シルト、埋3層が黄灰色シルトで、いずれも自然堆積と見られ

る。出土遺物はない。

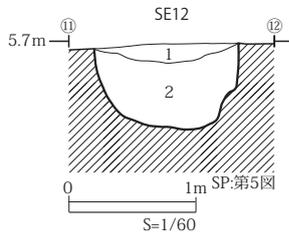


層	土色	土性	備考
1	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)	粘土質シルト	黄褐色シルトおよび荒砂を含む。
2	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	黒色シルトを含む。1よりも粘性があるが3よりも粘性が少ない。
3	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	暗灰黄色シルトを含む。粘性あり。

第 15 図 SE9 井戸跡断面図

【SE12】(第 5 図)

調査区西側で検出した素掘りの井戸跡である。掘り方の平面形は直径 1 m の円形で、深さは 70cm である。遺構の重複はない。断面形は U 字形で、底面は 60cm の円形である。堆積土は 2 層で、埋 1 層が均質な黒褐色シルト、埋 2 層が植物遺体を多く含む黒褐色粘土質シルトで、いずれも自然堆積である。出土遺物はない。

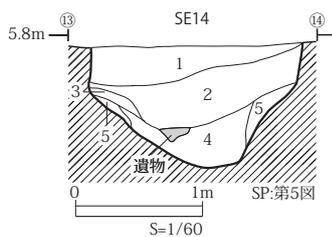


層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	酸化鉄を多く含む。均質、固く締まりあり。自然堆積。
2	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	植物遺体がラミナ状に堆積。自然堆積。

第 16 図 SE12 井戸跡断面図

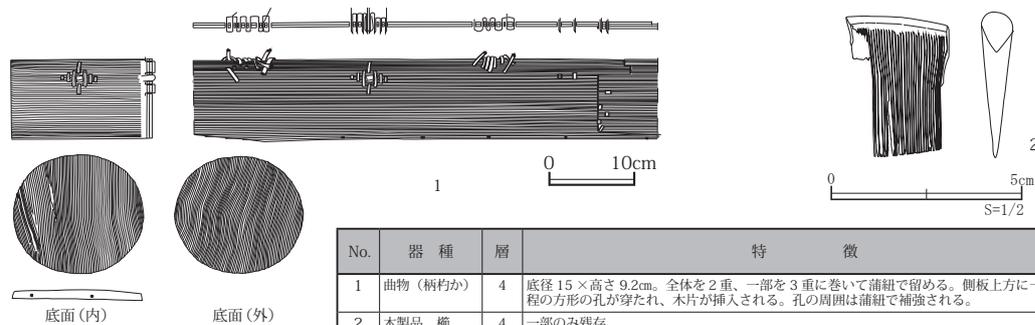
【SE14】(第 5 図、写真図版 3-①)

調査区の西側で検出した井戸跡である。井戸枠が抜き取られている。掘り方の平面形は 1.5 × 2.7 m の楕円形で、深さは 1m である。遺構の重複はない。断面形は緩やかな円錐状で、上端部が垂直に立ち上がる。底面は 40cm の円形である。堆積土は 3 層に大別でき、上位層が黒褐色シルトの自然堆積、中位層が暗緑灰色粘土質シルトの人為堆積、下位層が緑灰色粘土質シルトの自然堆積である。埋 4 層より曲物と櫛が出土している (第 18 図)。



層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	自然堆積。
2	暗緑灰色 (5G4/1)	粘土質シルト	礫や木片を多く含む。
3	緑灰色 (5G5/1)	粘土質シルト	地山の明灰白色シルトのブロック (φ 1 ~ 3cm) を混入する。
4	緑灰色 (5G5/1)	粘土質シルト	均質な自然堆積。櫛、曲物の出土層。
5	緑灰色 (5G5/1)	粘土質シルト	地山崩落土の流れ込み。

第 17 図 SE14 井戸跡断面図



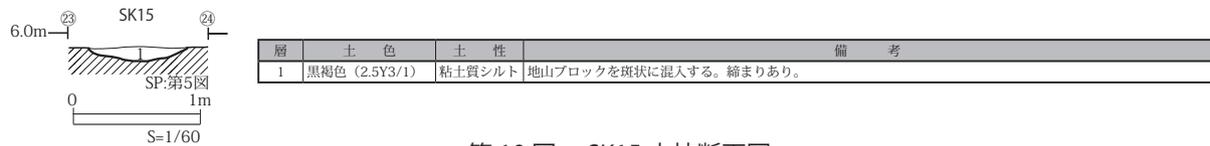
No.	器種	層	特徴	写真	登録
1	曲物 (柄杓か)	4	底径 15 × 高さ 9.2cm。全体を 2 重、一部を 3 重に巻いて蒲紐で留める。側板上方に一辺 1cm 程の方形の孔が穿たれ、木片が挿入される。孔の周囲は蒲紐で補強される。	4-16	TM42
2	木製品 櫛	4	一部のみ残存	4-15	TM43

第 18 図 SE14 井戸跡出土遺物

②土坑

【SK15】(第5図)

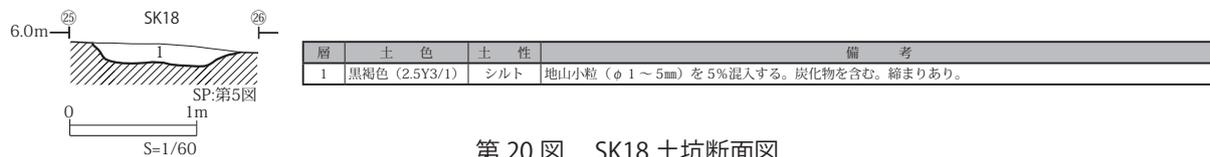
調査区の中央北側で検出した。長軸 1 m、短軸 80cmの隅丸台形である。深さは 12cmほどで、断面形は浅いレンズ状である。底面の起伏はない。埋土は 1 層で、黒褐色粘土質シルトである。出土遺物はない。



第 19 図 SK15 土坑断面図

【SK18】(第5図)

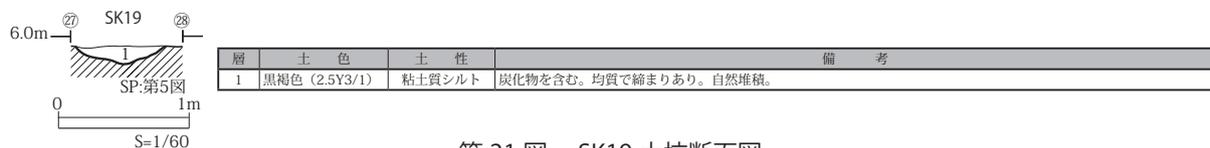
調査区の中央北側で検出した。長軸 1.2m、短軸 1m の円形を呈する。深さは 15cmほどで、断面形は皿状である。底面は平坦である。埋土は 1 層で、黒褐色シルトである。出土遺物はない。



第 20 図 SK18 土坑断面図

【SK19】(第5図)

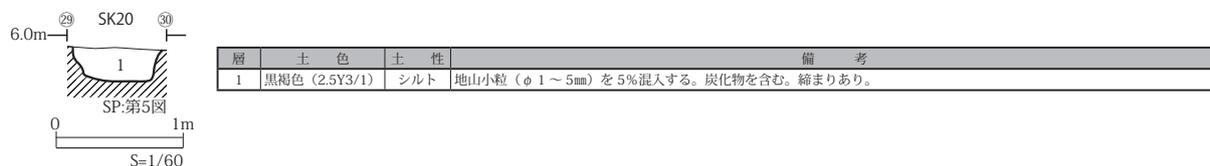
調査区の中央北側で検出した。直径 70cmの円形を呈する。深さは 15cmほどで、断面形はレンズ状である。底面の起伏はない。埋土は 1 層で、黒褐色粘土質シルトである。出土遺物はない。



第 21 図 SK19 土坑断面図

【SK20】(第5図)

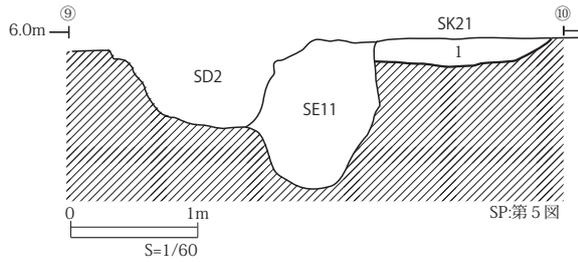
調査区の北壁付近で検出した。検出できた範囲で直径 70cm前後の円形と推定される。深さは 28 cmで、断面形は皿状である。底面は平坦である。埋土は 1 層で、黒褐色シルトである。出土遺物はない。



第 22 図 SK20 土坑断面図

【SK21】(第5図、写真図版 3-③)

調査区の東部で検出した。遺構の重複があり、SD2、SE11 より古く、SD3、SE10 より新しい。土坑の西側は、SD2 によって壊されている。残存する範囲で短軸 1 m、長軸 1.7m の長方形と推定される。深さは 20cmほどで、残存部の断面形は皿状を呈している。底面は平坦である。埋土は 1 層で、黒褐色シルトである。出土遺物はない。



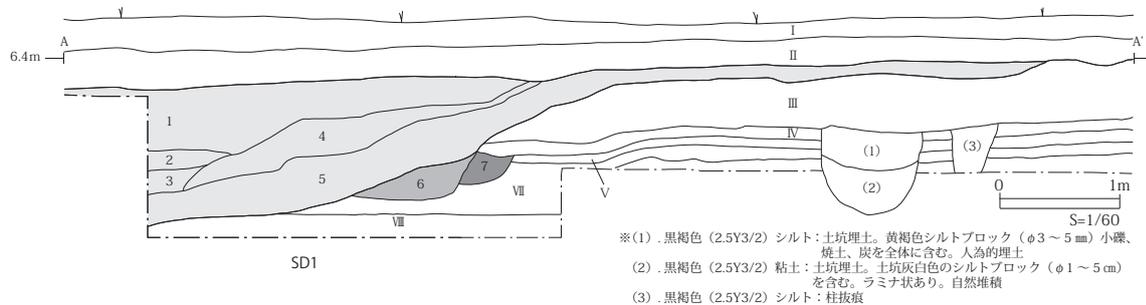
層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	浅黄色シルトの小粒 (φ 5mm) を全体に 5% 含む。炭化物を含む。締まりあり。自然堆積。

第 23 図 SK21 土坑断面図

③溝跡

【SD1】(第 5 図、写真図版 2-②、3-⑤)

調査区南側で検出した東西方向の溝跡である。SD2 と重複し、それよりも新しい。規模は検出総長 21m、上幅 2.4m 以上、残存部の断面形は皿状を呈しており、深さ 1.2m である。堆積土は 5 層で、いずれも自然堆積である。かわらけ、中世陶器甕、石臼、石製品が出土している (第 27 図)。



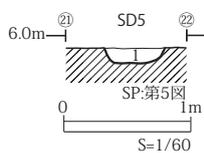
- ※(1) 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト：土坑埋土。黄褐色シルトブロック (φ 3 ~ 5mm) 小礫、焼土、炭を全体に含む。人為的埋土
- (2) 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘土：土坑埋土。土坑灰白色のシルトブロック (φ 1 ~ 5cm) を含む。ラミナ状あり。自然堆積
- (3) 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト：柱拔痕

層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/2)	シルト	黄褐色ブロック、黒色ブロック (φ 5 ~ 10mm) を僅かに含む。
2	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	褐灰色ブロック (φ 5 ~ 10mm) を 30% 含む。
3	黒色 (2.5Y2/1)	粘土質シルト	小礫 (φ 5 ~ 10mm) を全体に含む。木片を含む。
4	灰黄褐色 (2.5Y4/2)	粘土質シルト	褐鉄を帯状に含む。自然堆積。
5	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	下位は砂層となる。木片や炭を全体に含む。自然堆積。
6	にぶい黄褐色 (2.5Y4/3)	砂質土	小礫 (φ 5 ~ 10mm) を全体に含む。自然堆積。SD1 に先行する溝跡 (SD1-A)。
7	黒褐色 (2.5Y3/1)	砂質土	ラミナ堆積による粘土層との互層。自然堆積。SD1 の古段階の溝跡か。

第 24 図 西壁・SD1 溝跡断面図

【SD5】(第 5 図)

調査区中央北側で検出した溝跡である。SE8、SK15、SK20 と重複し、それらよりも古い。規模は検出総長 8.2m、上幅 40 ~ 50cm、断面形は皿状を呈しており、深さ 10cm である。堆積土は黒褐色シルトの人為的埋土である。出土遺物はない。



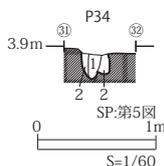
層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	地山粒 (φ 1 ~ 5mm) を 5% と炭化物を含む。締まりあり。人為的埋土。

第 25 図 SD5 溝跡断面図

④その他の遺構と遺物

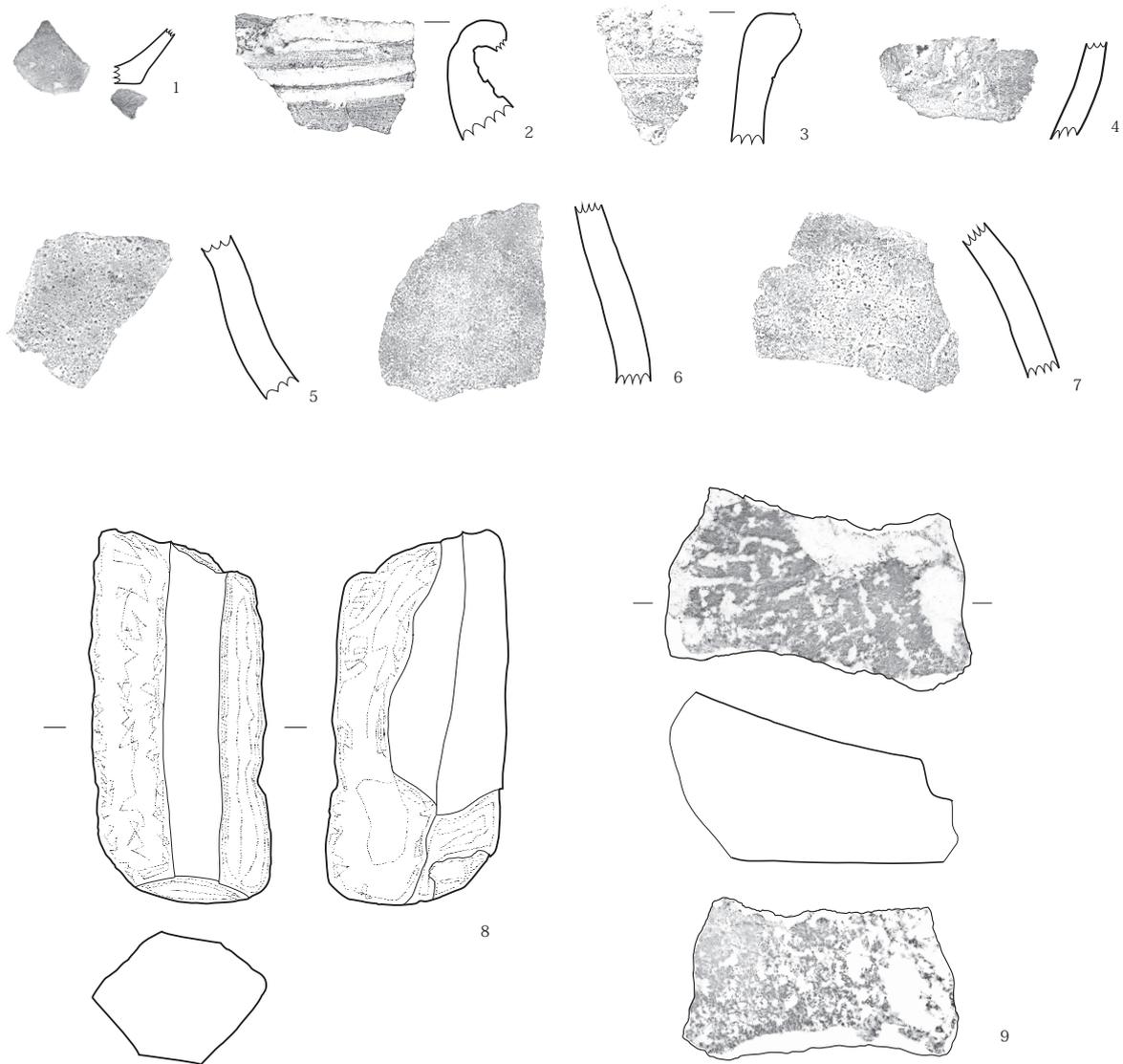
【P34】(第 5 図)

調査区北西のピット (P34) の柱拔取り穴から、かわらけ 1 点が出土している (第 28 図)。



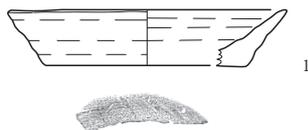
層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	地山粒 (φ 1 ~ 5mm) を 5% と炭化物を含む。締まりあり。柱抜穴。かわらけ出土。
2	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	地山粒 (φ 1 ~ 5mm) を 30% 含む。締りあり。掘り方埋土。

第 26 図 P34 断面図



No.	器種	層	法量 (cm)			特 徴	写 真	登 録
			口径	底径	器高			
1	かわらけ	中層	—	(5.0)	—	内外：調整痕不明 底部：ナデ 底部と体部の境に括れあり。	4-17	IT21
2	中世陶器 甕	中層	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 口縁部が外側に大きく外反する。 口縁部に横方向の沈線が施される。在地産。	4-18	IT14
3	中世陶器 甕	中層	—	—	—	内外：ヨコナデ 縁帯状口縁部の折り返し部欠損。常滑窯編年9形式。	4-19	IT16
4	須恵器 甕	中層	—	—	—	外：[口]ヨコナデ [胴]ヘラミガキ 内：[口]ヨコナデ [胴]ハケメ	4-23	IT34
5	中世陶器 甕	中層	—	—	—	内：ナデ 体部	4-21	IT22
6	中世陶器 甕	中層	—	—	—	体部	4-22	IT24
7	中世陶器 甕	中層	—	—	—	内外：ナデ 体部	4-20	IT29
8	石製品	5	—	—	—	石材：花崗岩 断面：六角形 うち4面は研磨により平滑。	4-24	IT38
9	石白・下白	5	—	—	—	明確な主溝・副溝はない。全面に被熱による煤が沈着。	4-25	IT39

第 27 図 SD1 溝跡出土遺物



No.	器種	層	法量 (cm)			特 徴	写 真	登 録
			口径	底径	器高			
1	かわらけ	柱抜穴	11.2	8	2.2	内外：ロクロナデ 底部：ユビナデ 外面に3段の起伏がある。	4-26	IT13

第 28 図 P34 出土遺物

第IV章 総括

(1) 入間野平城館跡について

「入間野平城館跡」に関わる文献資料はまだ確認されておらず、この館跡の正式な名称や築城年月、関係人物もわかっていない。大正14年に刊行された「柴田郡史」では、「入間野平城館跡」を「入間野山城館跡」(第2図-No.13)と一括し、「入間野城址」として次のように記している。「入間野城址 一、入間野区の西北部にあり、今郷人の館前と稱する所である、東西三十間南北四十間許りであつて圍字形をなしてゐる。年號干支不詳俗傳へていふ往昔小畑助之助之墟址(ママ)であると。是から西南三町許り距つた所に釜石が貳個ある。二、(入間野山城館跡は)入間野の東部字館の内にあり、小畑修理の墟址であると。年號干支不詳かでない。今は田圃となつて其の跡を認ることができない。封内古館記曰。入間野城山七十間五十六間城主入間野修理と申し候 封内風土記曰。古壘不詳何人居所壘下有釜石二個傳曰古昔壘主之釜也」。ここで「城主」とされる「小畑助之助」、「小畑修理」、「入間野修理」の素性や経歴についても史料では確認できない。また、「留守氏家譜」の明応九年(1500年)の記述に、留守家第16代景宗の家臣である「柴田七騎」の一人に「入間野源七郎」の名があるため、この人物を平城の城主とする説があるが、入間野平城館跡との関係を示す史料も見つかっていない。

(2) 主な遺構と出土遺物の概要

今回の調査は、入間野平城館跡で実施した初めての本発掘調査となる。調査の結果、井戸跡7基、溝跡4条、土坑5基、ピット120基を確認した。遺構の密度は高く、遺構の重複関係からも継続した土地利用の様子が窺える。出土遺物は中世が大半を占め、近世以降の遺物は出土していない。

確認した遺構のうち、SE10・11井戸跡、SD2・3溝跡、P34は出土遺物と遺構の重複関係から中世の遺構と推定できる。また、時代不明に分類したSD1溝跡についても、中世の溝跡を反映している可能性がある。以下、これらの遺構と出土遺物の概要をまとめる。

① SE10 井戸跡

井戸枠を引き抜き、埋め戻している。そののち、再び素掘りの井戸として使われている。

井戸の掘り方埋土から、中世陶器の甕の体部が出土した(第9図-2)。掘り方の地山の壁に貼り付けられており、壁の補強材として転用されたとみられる。甕の体部で、上部もしくは底部に近い部分と見られ、縦方向に荒くヘラケズリの痕跡がみられる。在地産の可能性が高く、13世紀後半から14世紀前半頃の所産と考えられる。

井戸埋土からは石臼、中世陶器の破片、かわらけが出土している。うち、かわらけは小皿3点(第9図-3・4・5)で、底部から口縁部が残存する資料が2点ある。いずれもロクロ成型で、底部から口縁まで内湾しながら立ち上がる。見込みと底面はナデが施され、底面切り離しの痕跡はナデにより消されている。2点ともに板状圧痕がある。所産の年代は不明であるが、掘り方埋土から中世陶器が出土していることから、少なくとも13世紀後半以降の資料と考えられる。

以上を踏まえると、SE10井戸跡の遺構年代は13世紀後半以降と考えられる。

② SE11 井戸跡

素掘りの井戸跡で、人為的に埋め戻されている。遺物は下層の自然堆積土からかわらけ 1 点、上層の人為的埋土から中世陶器の播鉢とかわらけ 1 点が出土している。

上層から出土した中世陶器播鉢（第 10 図一）は口縁部が平らで外傾する点など、白石一本杉窯跡の資料に類似しており、13 世紀後半から 14 世紀前半のものと考えられる。同じく上層出土のかわらけは、ロクロ成型による小皿の口縁部（第 10 図二）である。摩滅しており、年代は特定できない。

下層からは、かわらけの中皿底部（第 10 図三）が出土している。ロクロ成型の際に見込みの外周部に指で圧力をかけて僅かに窪ませ、切り離し後に見込みと底部にナデを施す。底面の切り離しの痕跡はナデにより消されている。底部と体部の境が括れ、板状圧痕を持つ。見込みに墨書がある。年代は特定できない。

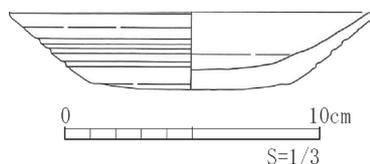
出土した中世陶器から、SE11 井戸跡の遺構年代は 13 世紀後半から 14 世紀前半と推定される。

③ SD2 溝跡

調査区東側の南北方向の溝跡で、前述した SE11 井戸跡より新しい。埋土は 2 層で、いずれも自然堆積土である。遺物は中世陶器甕、かわらけ、中国産とみられる天目茶碗で、すべて上層から出土している。中世陶器のうちの 1 点は口縁部が受け口状であることから、在地産と推定される（第 11 図一）。したがって、13 世紀後半から 14 世紀前半の所産と考えられる。

かわらけは底部から体部にかけての破片である（第 11 図一）。外面にはロクロ目に沿って棒状工具による沈線 3 条が入る。底部が厚く作られており、底部から口縁部の立ち上がりは湾曲せずに直線的に外へ開く。こうした特徴を持つかわらけは、福島県伊達市の梁川城跡（伊達市教育委員会 2018）、三春町の三春城跡三の丸（三春町教育委員会 2000）、城下近世追手前通遺跡群 B 地点（三春町教育委員会 1995）、郡山市阿子島城跡（郡山市教育委員会 1993）から出土している。梁川城跡では火災に伴う整地層から出土している（第 29 図）。小皿（7～9cm・SB 類）、中皿（10～12cm・ME 類）、大皿（13～14cm・LE 類）の 3 法量が確認されており、14 世紀後葉から 15 世紀前半に位置付けされている。

以上の出土資料から、SD2 溝跡の遺構年代は 13 世紀後半から 15 世紀前半と推定される。



第 29 図 （参考）梁川城跡整地層出土かわらけ

④ SD3 溝跡

出土遺物はない。遺構の重複関係から SE10 井戸跡より新しく、SD2 溝跡より古いことがわかる。したがって SD3 溝跡の遺構年代は、13 世紀後半から 15 世紀前半に収まると推定される。

⑤ピット (P34)

調査区北西のピットの柱抜き穴から、かわらけ1点(第28図一1)が出土している。

かわらけの断面形は、湾曲せずに直線的に外へ開く。外面は棒状工具による窪みが波状に2条、内面に3条確認できる。底面外周部にはナデが施され、切り離しの痕跡は観察できない。見込みの外周部に指で圧力をかけて僅かに窪ませる。断面形や調整の特徴がSD2溝跡出土のかわらけ(第11図一1)と類似しており、同年代の所産と推定される。

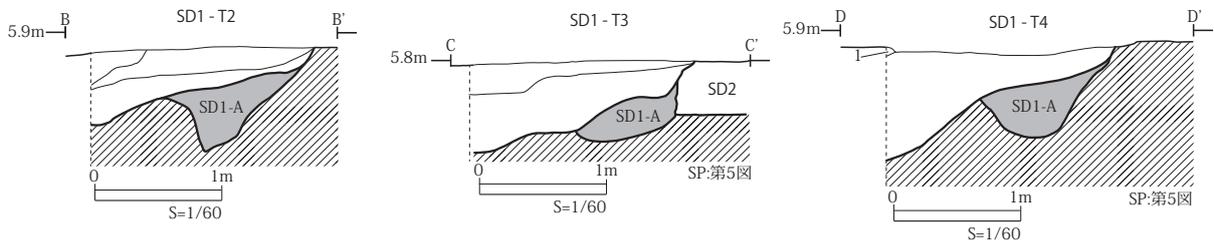
以上のことから、P34の遺構年代は14世紀後葉から15世紀前半と考えられる。

⑥SD1 溝跡

SD1 溝跡は検出層上面のⅢ層から掘りこまれることから、時代不明とした。本調査区の中では最も新しい時代の遺構であるが、時代を限定することができなかった。

しかし、SD1 溝跡の下層には、SD1に先行する2条の溝跡認められる(第24図の6・7層)。このうちの「6層」の溝は、SD1 溝跡上に設定したT2・3・4でもほぼ同位置に確認できることから、SD1 溝跡に先行する溝跡(SD1-A)と考えられる(第30図)。南北方向のSD2 溝跡(13世紀後半から15世紀前半)とは接続せず、それよりも新しい(第30図中央)。

したがって、SD1 溝跡には少なくとも新旧の2時期があると考えられ、旧溝跡を拡幅した可能性も考えられる。



第30図 SD1 溝跡トレンチ断面図

また、出土遺物には在地産の中世陶器の他に、常滑産の縁带状口縁の甕が含まれている(第27図の3)。口縁部の折り返し部分が欠損しているものの、常滑編年(中野1997)の9形式と考えられ、14世紀末から15世紀前半に位置図けられる。

以上からSD1 溝跡の遺構年代は不明なもの、埋土からは在地産の中世陶器(第27図2・5・6・7)と常滑9形式の甕が出土していることから、周辺の遺構が13世紀末から15世紀前半頃にかけてのものであることを示している。

(3) 入間野平城館跡の年代と今後の課題

以上の検出遺構の年代から、入間野平城館跡が機能したのは13世紀後半から15世紀前半、鎌倉時代後期から室町時代前期頃と推測される。その一方で、新しい時代の遺物が出土しないことから、入間野平城館跡が室町時代中期以降に使用されなくなった可能性も考えられる。

また、今回の調査で出土したかわらけに、梁川城跡(伊達市梁川町)や播磨館跡(福島県桑折町)

と同種のかかわりが含まれていたことは、入間野平城館跡と伊達氏との結びつきを示す貴重な成果といえる（第 11 図－1）。梁川城に関してみると、応永二十年（1413）に伊達家 11 代持宗（1393-1469）が居所を梁川城に移して以降、天文元年（1532）に 14 代植宗が桑折西山城に拠点に移すまでの約 1 世紀にわたって、南奥北部支配の拠点となった城館である。今回の調査で出土したかわらけは 14 世紀後葉から 15 世紀前半の資料と考えられるので、梁川城主は 11 代持宗の治世に相当する。11 代持宗は宮城郡の留守氏に継嗣（持宗次男）を入れるなど、積極的な姻戚外交を展開しながら勢力の拡大を図った人物である。

本調査地以外にも、槻木・船岡盆地には入間野山城館跡や、白石川を隔てた船岡館跡、入間野平城館跡同様の平城である西館館跡など、大規模な中世の館跡が存在する。中世伊達氏との関連性を踏まえながら、それぞれの館跡の出土資料の再検討し、現地踏査による資料の収集や分析が必要と考えられる。

引用・参考文献

- 桑折町教育委員会 2007 『播磨館跡発掘調査報告書』桑折町埋蔵文化財調査報告書 19
柴田郡教育会編 1972 『柴田郡史』
柴田町教育委員会 1978 『柴田町の文化財』第 10 集
柴田町史編さん委員会 1989 『柴田町史』通史篇 I
伊達市教育委員会 2018 『梁川城跡 総合調査報告書』伊達市埋蔵文化財調査報告書 第 30 集
東北歴史資料館 1976 『宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）』研究紀要 第 2 巻
東北歴史資料館 1976 『宮城県出土の中世陶器』研究紀要 第 3 巻
宮城県教育委員会 1996 『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第 172 集
宮城県教育委員会 2004 『中野高柳遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 197 集



1. 入間野平城館跡の空中写真 国土地理院（平成 23 年撮影：CTO201110-C8-10）

0 100m



2. 昭和 22 年撮影の空中写真 国土地理院（昭和 22 年撮影：USA-R-370-2）

0 100m

写真図版 1 入間野平城館跡の空中写真



①. 調査区全景（北から）



②. 調査区全景（東から）

写真図版2 調査区全景



①. 調査区全景 (西から)



②. SE10 井戸跡検出状況 (西から)



③. SE11 井戸跡検出状況 (西から)



④. SD2 溝跡 (北から)



⑤. SD1 溝跡 (西から)



⑥. SD2 溝跡 天目茶碗出土状況 (南東から)

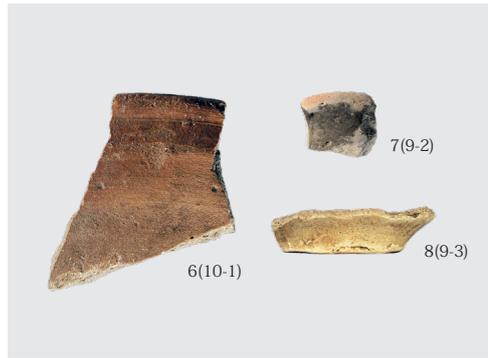
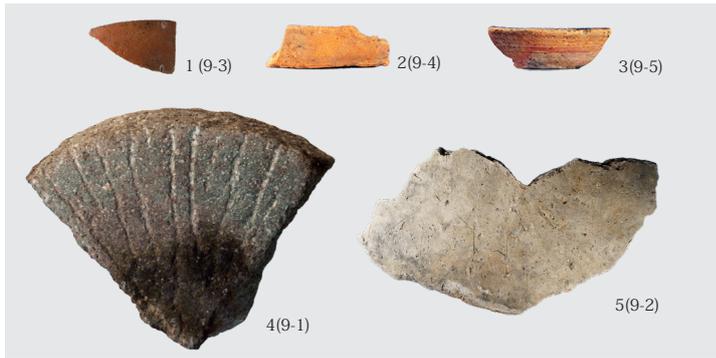


⑦. SD2 溝跡 石臼出土状況 (南から)



⑧. SE14 井戸跡 木製品出土状況 (南から)

写真図版 3 遺構・遺物の検出状況



SE10 井戸跡 埋土出土遺物：1～4 1～3：かわらけ 4：石白・下白
掘り方埋土出土遺物：5 5：中世陶器甕
SE11 井戸跡 埋土出土遺物：6～8 6：中世陶器甕 7～8：かわらけ ※縮尺：1～3、6～8 = 1/3、4～5 = 1/5 ※括弧内は本文図版番号



SD2 溝跡 埋土出土遺物：9～14 9：天目茶碗 10：かわらけ 11：陶器 12～13：中世陶器 14：須恵器
※縮尺：9～14 = 1/3 ※括弧内は本文図版番号



SE14 井戸跡 埋土出土遺物：15～16 15：櫛 16：曲物（柄杓か） ※縮尺：15～16 = 1/3 ※弧内は本文図版番号



SD1 溝跡 埋土出土遺物：17～25 17：かわらけ 18～22：中世陶器 23：須恵器甕 24：石製品 25：石白・下皿
P34 柱抜き穴出土遺物：26 26：かわらけ ※縮尺：17～23・26 = 1/3、24～25 = 1/5 ※括弧内は本文図版番号

写真図版 4 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いりまのひらじろたてあと							
書名	入間野平城館跡							
副書名	一令和2年度：調査受託事業発掘調査報告書一							
シリーズ名	宮城県 柴田町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	(柴田町) 畠山未津留							
編集機関	柴田町教育委員会							
所在地	〒989-1692 宮城県柴田郡柴田町船岡中央2丁目3-45 TEL：0224-55-2111 FAX：0224-55-4172							
発行年月日	2021年12月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いりまのひらじろたてあと 入間野平城館跡	みやぎけんしほたくん 宮城県柴田郡 しばたまちつきのきしたまち 柴田町槻木下町 いっちようめ 1丁目136-1、 136-2、138	04323	8091	38度 04分 51秒	140度 48分 53秒	20200303 ～ 20200306 20200518 ～ 20200619	確認調査 60 本発掘調査 230	集合住宅 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
入間野平城館跡	城館跡	中世	井戸跡、溝跡、土坑跡、 ピット	かわらけ、中世陶器、石臼、 天目茶碗、須恵器、曲物、櫛、 石製品		鎌倉から室町時代の井戸 跡、溝跡の他、時代不明の 井戸跡、溝跡を確認した。		
要約	<p>集合住宅新築工事に伴う調査の結果、井戸跡7基、溝跡4条、土坑5基、ピット120基を確認した。井戸跡と溝跡から中世陶器やかわらけが出土し、鎌倉時代後期（13世紀末）から室町時代前期（15世紀前半）にかけての遺構と推定される。出土したかわらけには、梁川城跡（福島県伊達市梁川町）のかわらけに類似する資料が含まれていた。</p>							

柴田町文化財調査報告書第6集

入間野平城館跡

—令和2年度：調査受託事業発掘調査報告書—

令和3年12月21日印刷

令和3年12月28日発行

発行 柴田町教育委員会

宮城県柴田郡柴田町船岡中央2丁目3-45

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
